

3月4日 四旬節第1主日

申 26:4～10 ロマ 10:8～13 ルカ 4:1～13

四旬節に入りました。私たち教会が主イエス・キリストの受難と復活によって実現された救いを歓喜に満ちて祝うために、その準備をするのがこの期節です。この期節の主日の聖書日課の学びは、洗礼志願者にとっても、また既に洗礼を受けている信者にとっても、教会が代々にわたって告白して来た信仰に固く立つためのものとして用いられます。このことへの良き理解が、21世紀を迎えた教会の私たちにも期待されています。いつの時代にも、そして現代においても、教会は“キリストの福音を覆そうと”する“ほかの福音”“別の福音”(ガラ 1:6-7)による惑わしの脅威にさらされて来ているのですから。

1. ルカ

主イエスの公生涯の最初のところで語られているこの物語りは、教会の宣教と信仰告白に固く結びついています。私たちはこの物語りで、ナザレから出て来た不思議な教師イエスについての当時の逸話の一つを聞くのではなくて、今や既に「死者の中からの復活によって力ある神の子と定められた」(ロマ 1:4) 主イエス・キリストについて学び始めるのです。

教会の宣教と信仰告白は、既に最初から、人間的な期待から生まれる“偽キリスト”への反論の形で語られて来ました。この荒野の誘惑の物語りで悪魔が語っているのは、最も人間的な期待に応えるメシア像の象徴的な三要素なのです。その一つ一つに、イエスは申命記からの引用を用いて答えられます。そしてそのような形で福音書は、主イエス・キリストへの教会の信仰告白を明確なものにしようとしているのです。

2. ロマ

使徒たちによって宣教され、教会が代々にわたって受け継いで来た福音の重要な主題について、私たちは今朝聞いています。使徒パウロは「わたしたちが宣べ伝えている信仰の言葉」(v.8)の内容として、「イエスは主である」と「神がイエスを死者の中から復活させられた」の二つをここで語っています(v.9)。復活の宣教は同時にキリストが「死んだ人にも生きている人にも主となられた」(14:9)ことの宣教なのです。ですから今日に至るまで代々の教会はそのように福音の内容を告白し、そのように信じて来ました。

主イエス・キリストの受難と復活から切り離して、人間的な期待によって作り出される仮想のメシアは、それがどんなに美しく魅力的に語られても、この世(現代)と来たるべき世(神の国)の主となられたキリストとは別物(偽キリスト)です。

v.10 「実に、人は心で信じて義とされ、口で公に言い表して救われるのです。」

私たちはそのように信じて来たのだし、そのように告白して洗礼を受けたのです。

3. 申

私たちが主日のミサの中で献金をささげるように、旧約のイスラエルの民も地の実りの初物を携えて祭に行きました。ここに収録されている信仰告白は非常に古い歴史を持っていて、パレスチナにおけるイスラエルの土地取得の記憶を生き生きと描き出しています。祭における献げ物がイスラエルの信仰告白と固く結びついていることに注目しましょう。そのように私たちが主日のミサでささげる献金も、主イエス・キリストの受難と復活によって実現された救いへの信仰告白と固く結びついています。それは私たちが主の奉献に一つに結ばれることであり(主の洗礼の祝日の奉納祈願)、教会の宣教と信仰告白への私たちの同意と承認の証しです。ですから主日のミサに参加してその中で献金をささげることは、キリスト者であることのしるしなのです。

4. ルカ

悪魔は人々の飢えを満たすために奇跡によってパンを供給することをイエスに提案しました。この提案は現代においてもますます魅惑的なメシアへの期待であると言えるでしょう。飢えと貧困は現代世界の緊急の問題であるからです。

私たちが主イエスと共に、「人はパンだけで生きるものではない」という申 8:3 の言葉を口にしたいと思います。しかし現代人である私たちは、それで悪魔を論破し沈黙させるなどということが到底不可能であることを、十分過ぎるほどよく知っています。聖書によって教会に伝えられて来たキリストの福音は、最早そのままでは現代人に通用しなくなってしまったのでしょうか。そのように教会が告白し続けて来た受難と復活のキリストへの信仰は、無力になってしまったのでしょうか。

悪魔の誘惑は、イエスの公生涯の初めの一回だけではなくて、受難の前夜のゲッセマネに至るまで何度も繰り返されました。しかし主イエス・キリストはその受難と復活によって、永遠の命を得させる生きたパンとなってくださったのです。

私たちは今、物質的な糧としてのパンではなくて、霊的な糧である命のパンこそが人を本当に生かすことを知っています。その命のパンをいただくために、すべてのキリスト者は主日のミサに集まって来ます。

拝領前の信仰告白

司祭：神の小羊の食卓に招かれた者は幸い。

一同：主よ、あなたは神の子キリスト、永遠のいのちの糧、あなたをおいてだれのところに行きましょう。

私たちは悪魔にではなくて、受難と復活の主イエス・キリストに向かって信仰を告白して歩んで行きます。

アーメン。

3月11日 四旬節第2主日

創 15:5～18 フィリ 3:17～4:1 ルカ 9:28～36

1. ルカ

四旬節の第2主日には、毎年マタイ、マルコ、ルカ各福音書の中の、同じイエスの山上の変容の物語りが朗読されます。

典礼暦の中で8月6日を“主の変容の祝日”として守る習慣は古くからのもので、現在もその通りなのですが、その祝日の福音書のテキストを四旬節第2主日にも朗読するようになったのは比較的新しいことでもあります。そしてそれに伴ってこの福音書のテキストと組み合わせられる旧約聖書と使徒書のテキストも、A年、B年、C年それぞれのために新しく選ばれました。

このようにして今日全世界のカトリック教会において、この日のミサに集まる会衆はこの新しい日課によって、主イエス・キリストの受難と復活によって実現された救いを祝う準備のための階段を登ることになります。

山上での主の変容の物語りには、律法の授与者モーセと偉大な預言者エリヤが登場します。「二人は栄光に包まれて現れ、イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について話していた」(v.31)と、ルカ福音書は語っています。この場面の栄光の輝きを目撃した三人の弟子たちの中の一人であるペトロが、自分でもよく分らないことを口に出している間に、出 40:34 で臨在の幕屋を覆ったのと同じ主の栄光の雲が彼らを覆いました。その雲の中から聞こえた天からの声、「これはわたしの子、選ばれた者。これに聞け」(v.35)を、私たちが今朝聞いているのです。モーセもエリヤもここでは主イエスの栄光の輝きの証人であり、他のだれにでもなく、受難と復活の主であるイエス・キリストに聞くということ……、このことの大切さを思いましょう。

この場面で現された主イエス・キリストの栄光は、将来の再臨の栄光の先取りであり、しるしであったのだと、古くから教会は理解して来ました。教会の希望である再臨のキリストは、「栄光に輝いて来る」(9:26)のです。

2. 創

旧約聖書によれば神はアブラハムに多くの子孫を約束し、これに「エジプトの川から大河ユーフラテスに至るまで」(v.18)と語られたパレスチナの地を与えるという契約を結ばれました。これが“古きイスラエルの民”であって、現代のイスラエル共和国はこの古きイスラエルの再建なのです。いわゆる中東紛争と称されるものがこの古きイスラエルの再建のための歴史の一局面であって、一方においてユダヤ人たちの信仰の中に今なおこのアブラハム契約が生きていることを理解する必要があるように思えます。

他方において教会は、イエス・キリストの血による新しい契約によって“神の国を受け継ぐ新しいイスラ

エル”となりました。神が古きイスラエルと結ばれたアブラハム契約は、教会を神の国の相続者とするイエス・キリストの新しい契約によって更新されたのです。これがパウロの語る“秘められた計画”です。(エフェ 1:9, 3:3-6、コロ 1:27 参照) ですから教会は、アブラハム契約で神が将来のイスラエルに約束されたものの正当な相続者なのです。(エフェ 1:11 参照)

3. フィリ

w.20-21 「しかし、わたしたちの本国は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、わたしたちは待っています。キリストは、万物を支配下に置くことさえできる力によって、わたしたちの卑しい体を、御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださるのです。」

私たちの信仰は、このような来たり給う再臨のキリストへの待望と、すべての救われたキリスト者のからの復活の希望に輝いています。受難と復活のイエス・キリストは、そのような救い主なのです。

アーメン。

3月18日 四旬節第3主日

出 3:1～15 Iコリ 10:1～12 ルカ 13:1～9

1. 出

モーセはイスラエルの人々をエジプトから導き出して、これを大いなる神の民とするために遣わされた人でありました。今朝私たちは、このモーセにではなくて、このモーセを遣わされたイスラエルの神ヤーウエに目を向けたいと思います。

この神ヤーウエは御自分のことを、「あなたたちの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である主」(v.15)として自己紹介しておられます。イスラエルの先祖アブラハム、イサク、ヤコブに対してなされた約束を実現される神こそが、モーセを遣わされた神ヤーウエでありました。

モーセは尋ねます。

v.13 「わたしは、今、イスラエルの人々のところへ参ります。彼らに、“あなたたちの先祖の神が、わたしをここに遣わされたのです” と言えば、彼らは、“その名は一体何か” と問うにちがひありません。彼らになんとか答えるべきでしょうか。」

神ヤーウエはモーセに答えられます。

v.14 「わたしはある。わたしはあるという者だ。」

そしてそれに v.15 が続きます。

ここで二つのことに注目しましょう。その第一は、神ヤーウエは出エジプトにおいて初めて登場した新しい神ではなくて、イスラエルの先祖アブラハム、イサク、ヤコブと共に歩まれた神であったということです。その二は、神ヤーウエはイスラエルという神の民を“存在させる” 神だということです。イスラエルが地上の他の民と区別された聖なる民であるのは、「わたしはある」と語られる神ヤーウエによることなのです。神の民イスラエルとは、神ヤーウエから独立しては“存在し得ない” ものなのだということを、モーセは語るように命じられたのでした。

2. ルカ

私たちは新聞やテレビで、事故や事件に巻き込まれて遭難したり死んだ人々のニュースを聞くとき、殆どその遭難者自身の内面の問題には関心を持ちません。そのような不運に巡り会ったのは、その人々が「罪深い者だったから」(v.2) だというようなことは、考えもしないのが現代人の姿です。

不運に巡り会い、遭難し、死んだ人々はかわいそうであった……、彼ら自身はみな善良な人々であったのに…… と考えるのは、しかし決して最近始まった考え方ではないと思います。出来ればそう考えたと思うのは、聖書の時代から現代に至るまでずっと同じなのです。

しかし聖書は、イエス・キリストの福音の語られるところでは、かなり大きく違った考え方が求められていることを示しています。“死は滅びである” という事実が、当然のこのようにイエスの口から語られます。

「そのような災難に遭った」「シロアムの塔が倒れて死んだ」人々は、自らの罪によって死んだのです。死んで滅んだのです。そこには弁解も例外も存在しません。その上で、「あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる」と警告されているのです。(v.3)

いったい私たちにとってイエス・キリストの救いは“あっても無くてもよい”ものではなくて、それ無しには私たちは罪と死によって滅びる以外に道がないのだということ、聖書は代々の教会に向かって語り続けて来ました。イエス・キリストの受難と復活によって実現された救いは、“あった方がよいもの”ではなくて、これなしにはすべての人が滅びに至るもの、これだけが唯一の神の国に至る門なのです。

3.

“悔い改める”とは、聖書においては“エス・キリストを信じる”ことという意味で用いられている用語です。歴史のキリスト教はしばしば聖書から切り離して、この“悔い改める”という言葉の不適切に解釈して来ました。私たちがその中で育って来た20世紀のキリスト教も、その不適切な範例から決して無縁ではありませんでした。

新約聖書をていねいに読むと、“悔い改める”という言葉はイエス・キリストを信じること、福音を信じること、そして洗礼を受けてミサをささげる群に加え入れられることと結びついていることが分ります。言い換えれば、洗礼を受けてミサをささげる会衆の中に加え入れられるということから切り離しては、聖書の“悔い改める”という言葉は決して正しく理解出来ないということです。

4. Iコリ

v.12 「だから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけるがよい。」

私たちにとって、受難と復活の主イエス・キリストはかけがえのない救い主です。私たちが主日のミサでそのいけにえを記念するキリストは、昔も今も変わらない同じキリストです。その同じキリストが、やがて教会に神の国を受け継がせてくださいます。ミサの祭儀は私たちキリスト者の生活全体の中心であって、その中に神の動きの頂点があり、その中に私たちの礼拝の頂点があります(ミサ典書書の総則1)。ですから私たちは、真に悔い改めたいと願うなら、ミサを大切にしましょう。

v.6 「これらの出来事は、わたしたちを戒める前例として起こったのです。」

私たち教会が神の国を受け継ぐ新しいイスラエルであるのは、イエス・キリストの救いによるのです。そのような神の国の相続人としての教会(ロマ8:17)は、イエス・キリストから離れて、これから独立しては存在し得ないことを、21世紀の教会は再認識しなければなりません。

“わたしたちの主イエス・キリストの父である神”(エフェ1:3)は、モーセに向かって「わたしはある。わたしはあるという者だ」と語られた神と同じ方です。教会を神の国の約束に与かる民として“歩ませ(存在させ)てくださる”神に賛美！ アーメン。

3月25日 四旬節第4主日

ヨシュ 5:9~12 IIコリ 5:17~21 ルカ 15:1-3,11-32

1. ヨシュ

旧約の民イスラエルは、エジプトを出て40年後に、約束の地パレスチナに入りました。そして、過越祭を祝う神の民の新しい歴史がここから始まったのでした。それは過去との決別であったということを、ヨシュア記はここで説明しているのです。

v.9 「主はヨシュアに言われた。“今日、わたしはあなたたちから、エジプトでの恥辱を取り除いた(ガラ)。”」

異邦の罪と汚れを取り除いて神の民としての新しい歩み始める儀式として、民全員は割礼を受けました。

私たちは今年も主イエス・キリストの過越を祝う準備の期節を歩んでいますが、それは洗礼の秘跡によって新しい神の民とされた人々のための祭であることを思い起こしましょう。

2. ルカ

洗礼の秘跡は主イエス・キリストの死に結ばれて罪に対して死に、その贖いの恵みによって義とされる入信の儀式です。ですから洗礼を受けてキリスト者としての人生を歩んでいる私たちは、自らが罪人であること、キリストに赦された罪人であるという事実を深く思うことが大切です。神の子イエス・キリストだけがこの私の罪を赦して神の義を得させてくださるということ……、私の罪を赦して神の民として歩ませてくださる方は受難と復活の主イエス・キリスト以外にはないということを、私たちは今朝の福音書から学び取りたいと思います。

放蕩息子の譬え話は、素晴らしい愛の物語りですが、ルカ福音書はこれを洗礼の秘跡を受けてミサをささげている教会の会衆のために記録に残しました。

「しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。」(ロマ 5:8)

まだ遠く離れていたのに、……走り寄って首を抱き、接吻した(v.20)父親とは、明らかに洗礼の秘跡によって私たちの罪を赦してくださった主イエス・キリストのことです。主イエス・キリストの死に結ばれる洗礼の秘跡は、罪のために死んでいた私たちを(エフェ 2:5)、新しい命に生かしてくださいました(ロマ 6:4)。

私たちがこうして今朝も共に主日のミサをささげているとき、天には大きな喜びがあるのです(v.32)。

3. IIコリ

v.17 「だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。」

2001年3月(主日C年)

聖書が「キリストと結ばれる」という言葉で洗礼の秘跡を受けてミサをささげている会衆のことを意味しているのは当然のことです。

父親のもとに改心して帰って来たからといって、放蕩息子の過去が消せた訳ではないように、私たちも罪のために死んでいた過去を消せる訳ではありません。しかし洗礼の秘跡によって私たちは、神に対して生きる者として新しく創造されました。この洗礼を受けた会衆の共同体である教会に、救い主は御自分の死と復活の記念の祭儀であるミサを託してくださいました。

ですから教会を離れては、私たちの救いはありません。カトリック要理は教会を「救いの普遍的秘跡」と表現し、「キリストは教会のうちに現存し、聖霊をもって救いの恵みを人びとにお授けになります」と教えています。

私たちは神の義を得させていただいて(v.21)、信仰の道を歩んでいるのです。

アーメン。